

新たな受注確保の道を探求

今年偶然ではありましたが若いすばらしいデザイナーを迎え入れることができました。また、事務職に1人迎え入れました。出費が多くなるからと踏み切れなかったインターネットも開始しようとしています。単なる価格競争でなく、安心してまかされる印刷所めざし、また本作り20年間の経験を生かし、文字入力から上製本まで喜ばれる経営を確立し、販路を広めたいと思っています。

千葉集会 / 第4分科会 /

高齢者の仕事おこし と社会参加

高橋 巖

(農協共済総合研究所)

現在農村部では、他に類例のないスピードで高齢化が進行している。こうした農村部においては、高齢者が地域農業の担い手となっている地域も多いが、それは従来、否定的に捉えられてきた。そこに中心にあるのは、高齢者を、若年層と対比して「弱く、自立できない」存在であると見なし、経済行為の担い手たりえないとする考え方なのではないか。あるいは、生産性を高めるため、高齢者はなるべく早く農業をリタイアし、生産性の高い若年層に経営を集約するという「構造政策」上、それを「阻害する者」が「滞留」するが如く扱うといった、高齢者の役割を過小評価する論調にあったのではないだろうか。

しかし実態として、高齢者は地域農業において極めて重要な位置にある。もとより、高齢者のうち約9割は、介護等が不要な「元気な高齢者」であり、そして農村部では、そうした高齢者たちが、高齢者営農をはじめとする多様な活動を通じて、地域農業の維持に貢献しているのである。

すでに筆者は、拙著*)でこのような高齢者の役割に光を当て、その実態と重要性を詳細に分析するとともに、こうした高齢者が活躍する場づくりが重要であること、そして、それによって、今後とも、定年帰農等によりその再生産が可能であることを体系的に明らかにしたが、本報告ではそれに基

づき、農村部における高齢者の役割を改めて整理し、今後の方向性を検討したい。

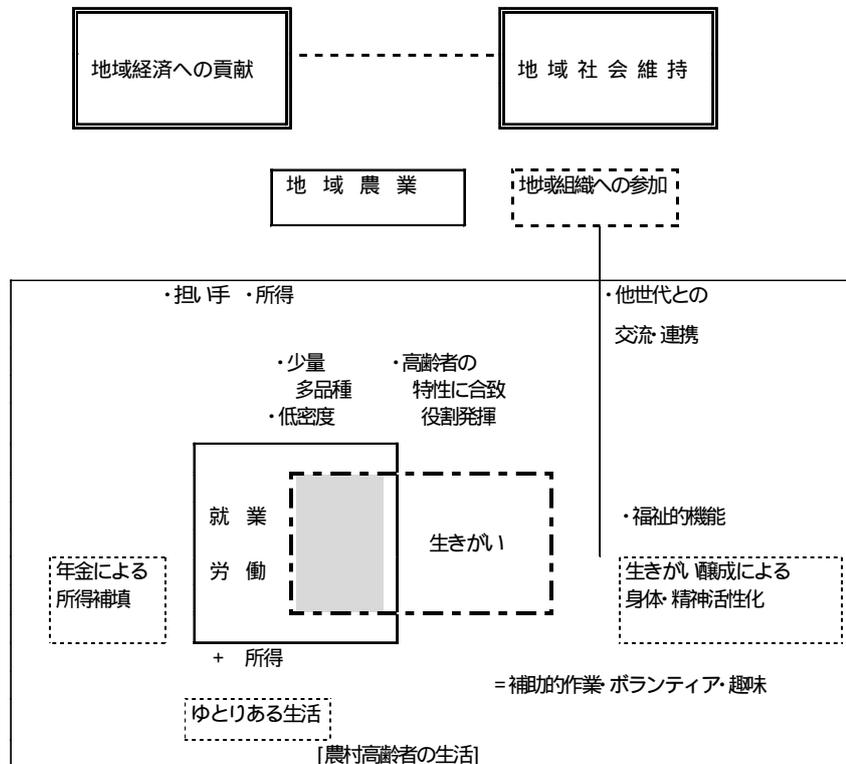
まず、地域農業における「元気な高齢者」の実態についてみると、統計分析や活動事例の分析等を通じて、高齢者の活動を「生きがい」に限定する通説と異なり、高齢者は、生産活動を通じた所得形成など多面的なニーズをもっており、また実際に地域農業においては、それを通じて生きがいを実現している実態が明らかとなった。とりわけ、全国的な事例の分析を詳細に行った結果、高齢者の取り組みは極めて多様であるが、その多くは単なる「生きがい」活動ではなく、生産活動として地域に位置づいている実態を示し、高齢者の活動は、「生きがい」と「就労」の多面的なニーズがあることを指摘した。これを図で示すと、右のとおりになる。

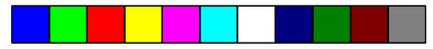
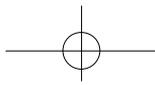
また、近年注目されるのが、「定年帰農」である。これは、定年退職後の就農者を指すが、マスコミで注目される「定年帰農」は、都市住民が農村転入等によって就農するイメージで語られてくることが多かった。しかし現実には、農村に居住しつつ兼業の傍ら農業を続け、定年退職後に農業に専念するような農家世帯の担い手が数多く存在している。すなわち、従来、政策の対象外とされていた在宅通勤兼業農家の離職後就農をはじめ、故郷へのUターンによる就農者等が近

年増加しており、地域農業の担い手としても重要な位置を占めつつあるのである。

報告者は、こうした層も「定年帰農」として捉え、これまでほとんど試みられなかった広域的な調査をもとに、その実態を分析した。この結果、安定的な第一種兼業を経験した定年帰農者は、年金収入をベースとしながら農業を続けているが、身体の続く限り農業をしたいとするなど営農に積極的であり、経営規模の維持においても意欲的であること、また、平地農業地域における集落営農のオペレーターとしても、年金で労賃が補填されることから担い手となりうるということが明らかとなった。すなわち、定年帰農者は、高齢化の進む山間地域だけでなく、条件の整備された平地農業地域も含めて、地域農業の当面の担い手として重要な位置にある。

図 高齢者労働の多面性と地域農業（概念）





り、また恒常的な勤務による安定兼業者が農家世帯で増加していること、また、今後は、最大世代である「団塊の世代」が数年後に定年を控えていることから、今後の地域農業における担い手として再生産が可能であることを明らかにしている。

これらは、地域農業の担い手が減少し高齢化が進む中で、担い手である高齢者の活動の場が十分整備されず地域農業が後退局面にある地域において、それを再建するための検討材料たりうるものと思われる。

今後、高齢化が一層進む中では、高齢者の「自立」が極めて重要な意味を持つ。しかしそれは、単なる政策的インプリケーションによるものではない。本報告で指摘する「高齢者が経済行為の担い手になる」という「高齢者の自立」を示す事象が、単に年金等社会保障費の削減の論拠として表現されるのだとしたら、それは筆者の本意ではない。そうではなく、今後の高齢社会における高齢者の自立によって、高齢者と非高齢者が、対立でも、依存や施しでもないパートナーシップを組むという「共生」的な関係性を実現するとともに、すなわちそれが、一人一人の人間が文字どおり「生きる」ことの尊重につながり、今後の社会のあり方のメルクマールになると考えるのである。そしてそこでは、高齢者と非高齢者の両者がお互いをどのように認めあい、対等な関係をつくって問題を調整していけるかが重要になる。それは、ネットワーク的な社会の基礎となる関係性であろう。

これからより高齢化が進む中では、かかる高齢者の主体的な取り組みとともに、「定年帰農」にみられる多面的なライフスタイルについては、様々な視点から分析すべきポイントとなる。

*) 高橋 巖 (2002) 『高齢者と地域農業』家の光協会

千葉集会 / 第 6 分科会 /

「元気やさいネット」と「とらため農業協働組合」のこと

片柳義春

(元気やさいネット・やまと/とらため農業協働組合代表)

1. 「市場」の復権運動としての「元気やさいネット」

何じゃ、この低い自給率は？ 農薬にまみれた食べ物を食べと言うのか？

現在の農業は非常に厳しい時代を迎えています。輸入農産物がどっと押し寄せ、自給率がわずか 30 パーセント台しかありません。この自給率はアフリカや砂漠の飢餓地帯の自給率です。さらに輸入農産物からは高濃度の農薬や日本で使ってはいけない農薬が検出され、問題になっております。国内でもまたしかり。先進諸国に較べて単位面積あたりの農薬使用量が 10 倍という日本の状態はかなり危ないと言えます。

例えば私が以前農家向けの雑誌を販売していたときの事です。あるキュウリのハウス栽培農家を訪問したとき、2 歳ぐらいのヨチヨチ歩きの子どもがハウスの中からキュウリをかじりながらでてきました。それを見るや否や母親が血相を変えて子どもを逆さにして、飲み込んだ物を全て吐き出させていました。こんなキュウリを私たちは知らずに食べているのです。農薬をまいている農家の方もかなり非道い状況です。先日知り合った有機栽培の農家の方は、若い

